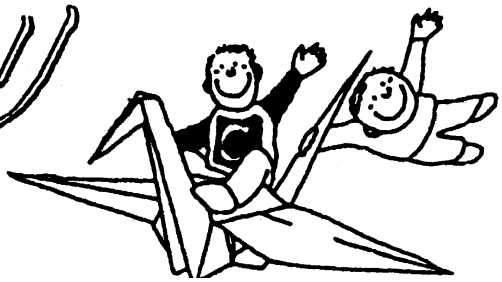
「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」ニュース　１０４号　　２０１６．０２．０８

ジュラーヴリ

ЖУРАВЛЬ



チェルノブイリ30年・フクシマ5年／国際シンポジウム

チェルノブイリ・フクシマを繰り返すな

事故被害者の補償と人権の確立に向けて

フクシマを核時代の終わりの始まりに

＊ゲスト・スピーカー

＜チェルノブイリ事故被災地から＞

ジャンナ・フィロメンコ　:「移住者の会」代表（ベラルーシ）

パーベル・ブドビチェンコ:「ラディミチ・チェルノブイリの子ども達のために」元代表（ロシア）

＜フクシマ事故被災地から＞

馬場　有　:福島県浪江町　町長

秋葉信夫:「フクシマ原発労働者相談センター」事務局長（いわき）

＊プログラム

Ⅰ部:チェルノブイリとフクシマを結んで

- 基調報告
- チェルノブイリからの報告
- 討論

Ⅱ部:チェルノブイリ・フクシマを繰り返させないために

- 特別報告　広島・長崎・福井から
- 討論
- アピール提案、討論、採択

ミンスク郊外の風力発電

日時:4 月 3 日　10 時~16 時半

場所:大阪府教育会館（たかつガーデン8階）

主催:チェルノブイリ 30 年・フクシマ 5 年―国際シンポジウム実行委員会　（チラシ参照）

国際シンポジウム開催へのご協力とご参加をお願いします！

　チェルノブイリ事故３０年・フクシマ事故５年を迎えます。チェルノブイリとフクシマの原発重大事故は、国境を越える広範な地域を放射能で汚染し、何百万人もの市民と労働者に被ばくを強いています。事故の被害は長期にわたり、人々の命や健康のみならず、生活全体、さらに社会・経済・文化にも及び、生命権・健康権・生活圏をはじめ様々な人権が侵害されています。

　フクシマ事故は世界に大きな衝撃を与えました。核と人類は共存できないことを改めて示しました。事故後、ドイツをはじめ多くの国々は脱原発と再生可能エネルギーの推進へと政策を転換しました。しかし、日本政府と電力・原子力産業は、脱原発に向かう世界の流れに逆行し、重大事故が起こることを前提に全国の原発再稼働を強行し、また原発輸出を進めようとしています。

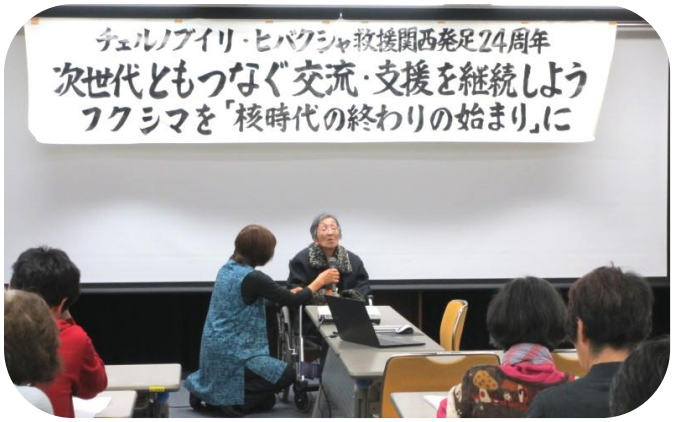
　原発重大事故を、これ以上繰り返させてはなりません！日本の原発再稼働を止めさせ、脱原発、再生可能エネルギーへの転換を政府に要求します。そして、東電はもちろんの事、国策として原発を推進し重大事故を招いた国の責任を厳しく問い、事故被害者への補償と人権の回復・確立に向けて進まなければなりません。さらに、核のない未来を目指し行動を強めなければなりません。
　このような思いを同じくする皆さんと共に、私たちは「チェルノブイリ３０年、フクシマ５年」の節目に、「国際シンポジウム」を大阪で開催します。

　「国際シンポジウム」では、チェルノブイリとフクシマの被災地からゲストを迎え、チェルノブイリ事故３０年、フクシマ事故５年の被害者の体験に学び、「重大事故をこれ以上繰り返させてはならない」という思いをより多くの人々に伝えていきたいと思います。さらに、二つの事故とその被害の普遍性、歴史的・社会的背景による特殊性を理解し、被害者の補償と人権の確立・回復を目指す運動の前進に繋いでいきたいと考えます。また、二つの原発重大事故の被害者どうしが出会い、交流と連帯を深めるきっかけにしたいと思います。

　「国際シンポジウム」では、原発重大事故をこれ以上繰り返させないために、脱原発と再生可能エネルギーへの転換、ヒバク反対、被害者支援等に具体的に取り組んでいる、各地の皆さんからの報告やアピールも受け、連帯を深め、運動を強め拡げていきたいと思います。そして「フクシマを核時代の終わりの始まり」にすることを目指し、さらに進んでいきましょう。

　私たちは「３．１１」以降、「フクシマを核時代の終わりの始まりに」を合言葉に、多くの皆さんと共に、脱原発・再稼働反対、住民や労働者への被ばくの強要反対、フクシマ事故被害者との連帯・支援に、全力で取り組んできました。同時に「脱原発から非核未来を探る」「核被害者人権の回復・確立をめざす」「フクシマとヒロシマ・ナガサキを結び、非核・放射線教育、平和・人権教育を進める」等々をテーマにシンポジウムや学習会にも取り組んできました。これまでの運動の経験とネットワークをこれからの運動に活かすためです。ヒロシマ・ナガサキ７０年から、チェルノブイリ３０年・フクシマ５年にあたり、このような活動と議論をさらに深め、これからの運動の力にしていきたいと思います。
「国際シンポジウム」開催に、是非ご協力、ご参加ください！

「救援関西」発足24周年の集い



2015 年 12 月 13 日、大阪市立生涯学習センターで「救援関西」発足 24 周年の集いが開かれました。

長崎被爆者の山科和子代表の挨拶「ここまで続けてこられたのは皆様のおかげです。」という感謝の言葉に、スタッフみんなの気持ちも凝縮しています。皆さんに支えられて 24 年間歩んでくることができました。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

事務局報告とそれに続いて、9 月下旬にベラルーシを訪問した振津・長沢・猪又から現地訪問報告とベラルーシにおけるチェルノブイリ被災地者への施策についての報告を行いました。（いのまた）

【事務局報告−発足２４周年を迎えて、来年チェルノブイリ 30 年・フクシマ５年へ】

今年ヒロシマ・ナガサキ７０年、そして来年チェルノブイリ３０年、フクシマ５年。また来年は、「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」発足２５年でもあります。私たちは、この「節目」の時期に、これまでの活動の意義と課題を再確認し、次の世代にもつないでゆけるようにと、多くの皆さんとともに取り組んできました。

１）　今年の活動を振り返って

＊ヒロシマ・ナガサキ 70 年から チェルノブイリ 30 年・フクシマ 5 年にむけて

～「救援関西」の四半世紀の活動を振り返り、新たな一歩をともに踏み出すために～

①　「チェルノブイリ原発事故２９周年の集い」

・　ヒロシマ・ナガサキ 70 年から チェルノブイリ 30 年・フクシマ 5 年にむけて
　救援関西の原点のひとつとしてのヒロシマ・ナガサキ
　ヒバクシャとの交流からから学んだこと
　「救援関西」の四半世紀の活動を振り返り、新たな一歩をともに踏み出すために
　フクシマを核時代の終わりの始まりに!

・　山科さんのお話・ビデオ

・　長年、被爆者医療、被爆者や原発労働者の救援活動に携わってこられた村田三郎先生を迎えてのお話と対談

②「被爆７０周年 非核平和シンポジウム」に実行委員会の一団体として取り組んだ

・　原水禁５０年の歴史を振り返り、伝統と教訓を受け継ぐ

・　被爆体験の継承、平和・人権教育を、非核・平和、生きるための学びへとつなぐ

・　ヒロシマ・ナガサキ・フクシマを結び、脱原発から非核未来を探る

③チェルノブイリ支援・交流

・９月：現地訪問

・　各地での救援バザーなど

・　ベラルーシの子どもたちの「ノボ・キャンプ」にクラスノポーリエから５人の参加支援。

④フクシマ支援・交流

・「ゴー・ゴー・ワクワク・キャンプ」など、被災地の子どもたちの保養支援への協力

・　関西や全国で保養支援に取組む皆さんとの交流

・　「国の責任で１９歳以上の甲状腺医療費支援を」賛同署名の取り組みに協力

・　１１月１９日：アントンさんを囲んで「保養」について話し合う会

・　１１月：福島被災地訪問交流：アントンさん、ペテゥーチさんとともに

⑤これ以上の核被害をなくすために

・　３月８日：「さよなら原発・関西行動」

・　５月１１日「チェルノブイリ２９周年」に際して、関電への申し入れ行動

・　対関電、再稼働反対、関西や福井での脱原発の様々な取組みへの参加

・　「緊急時被ばく基準」引き上げ反対の署名の呼びかけ

・　８月９日：川内原発再稼働反対、現地行動参加

・　１０月１８日：「戦争はいやや、核なんかいらへん、フェスティバル」（長居「反核フェス」）

・　１１月２１～２３日：「世界核被害者フォーラム」協力、参加

・　１１月２４日：ウラン採掘に反対する米先住民との連帯、講演会。

２）来年の取組みについて（提案）

＊フクシマを「核時代の終わりの始まり」に！

＊チェルノブイリ３０年・フクシマ５年へ

＊「救援関西」の四半世紀の活動を振り返り、新たな一歩をともに踏み出そう

①　４月３日**「チェルノブイリ３０年、フクシマ５年–国際シンポジウム」**に大阪で取り組みましょう。

・　原水禁などが取り組む、東京での３月２６集会、２７日シンポとも連携

・　メインテーマ：

フクシマを核時代の終わりの始まりに

チェルノブイリ、フクシマの被害者の補償と人権の確立に向けて

・　ヒロシマ・ナガサキ７０年から、チェルノブイリ３０年、フクシマ５年に向けた一連の取り組みの一環として、これまでの議論の成果もふまえて取り組みたい。

・　チェルノブイリ３０年、フクシマ５年の節目に、チェルノブイリ事故の３０年間とフクシマ事故の５年間の被害者の体験と思いを改めて聞き、共有する。またふたつの原発重大事故の被害者どうしの交流と連帯を深めるきっかけにもしたい。それらを通じ、チェルノブイリとフクシマのそれぞれ特殊性と普遍性をふまえつつ、またヒロシマ･ナガサキ７０年の被爆者の運動の経験と成果もふまえつつ、原発事故被害者とともに、その補償と人権の確立をめざす、今後の取り組みに繋いでゆくことをめざす。またこのような原発重大事故の甚大な被害（グローバルな被害も含めて）を、これ以上繰り返さ

せないためにも、脱原発と再生可能エネルギーへの転換を求める具体的な取り組みの報告やアピールを受け、今後の連帯した運動につないでゆく。
・ ベラルーシ、ロシア、フクシマからゲストを招聘。広島・長崎・福井からも参加依頼。
関西を中心に取り組んでいる再稼働反対・脱原発、ヒバク反対、再生可能エネルギーの推進、等、様々な運動と結んで。広く賛同・参加を呼びかける。
・４月２６日前後には、対関電申し入れを呼びかけ、取り組む
②チェルノブイリ支援・交流に取組みましょう。
・「ノボ・キャンプ」へのベラルーシの子ども達の参加支援
・ 現地調達を主体に、現地のニーズにあわせた支援
・ 現地の新しい世代との協力・交流も進める
③フクシマ支援・交流に取組みましょう：
・フクシマ事故被災地の子ども達の「保養支援」への協力に引続き取組みましょう
- 「ゴーワクキャンプ」への支援
- 全国で「保養」などの支援に取り組む人々との連携
・「カーちゃんの力プロジェクト」のサポーターを広げる
・ 国の責任を問い、被災者への支援策を求める運動への協力
・ フクシマ被災地と関西との交流を深め、被害の実相を広く伝えてゆきましょう。
・ チェルノブイリとフクシマとの交流をさらに進めましょう
④原発再稼働に反対し、脱原発と再生可能エネルギーへの転換を求める取り組みに、積極的に参加しましょう
・ ３月「フクシマ事故５周年」の脱原発関西集会参加など
⑤「救援関西発足２５周年」に向けて
・ これまでの活動を振り返り、またチェルノブイリ３０年の被害を、できる限りまとめる。
・ これまでにチェルノブイリ支援・交流から学んだことを、フクシマの被災者や、次の世代に伝える。
・ 理論的な課題（２９周年の集いで提起）についても取り組む。

ベラルーシのチェルノブイリ被災地訪問報告

訪問目的

・汚染地との支援・交流を続けるために、現地での活動の後継者を探す：

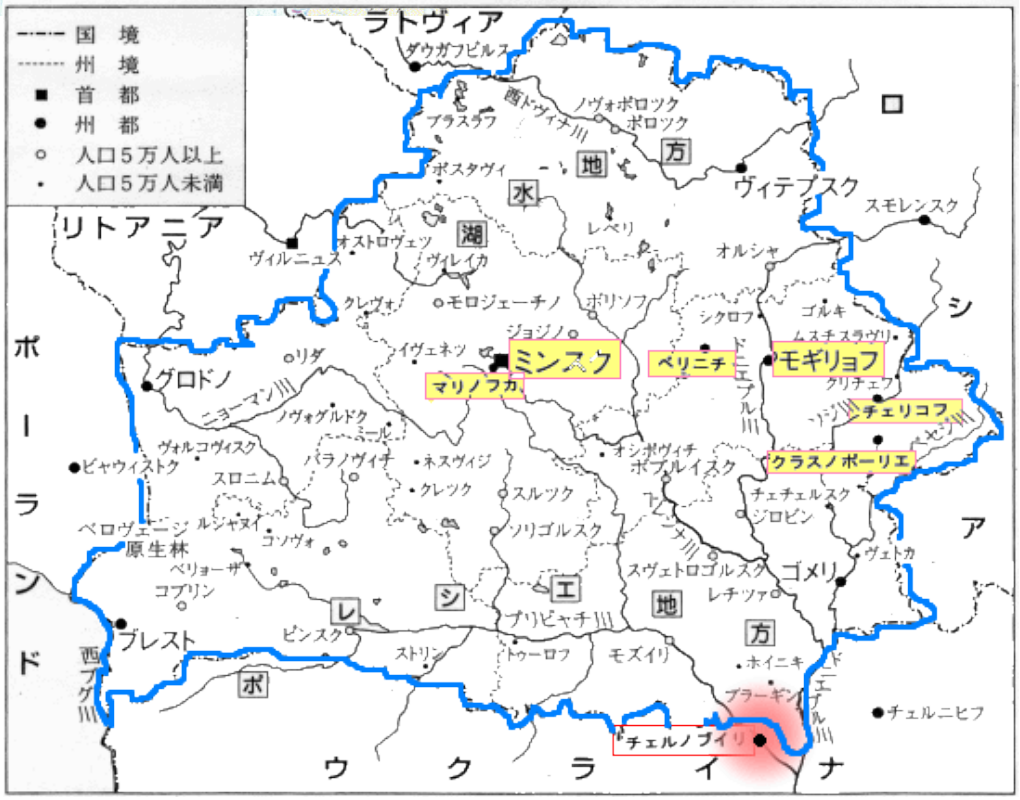
ベーラさんやバーリャさんをはじめ「救援関西」発足当初（1991年）から、私たちの活動を現地で支えて下さってきた方々が「動けない」状況での現地訪問は、今回が初めてでした。ベーラさんたちがこれまで果たしてこられた役割を引き継ぎ、私たちとの友情と連帯を繋いでくれる現地の「後継者」の方々との絆を深め、今後の活動につないで行く「新たな第一歩」を踏み出せるかどうかが、大きな課題でした。

・日本でも、現地でも、次の世代に運動をつなぐ準備を：

今年「ヒロシマ・ナガサキ７０年」を迎え、日本でも次の世代に被爆体験と運動を繋いでゆくことが重要な課題になっています。チェルノブイリは来年「３０年」で、健康被害全体の顕在化、被害者への支援、被災地の本当の意味での「復興」も、まだまだこれからという状況です。「ヒロシマ・ナガサキとチェルノブイリを結んで、核被害のない世界をめざそう」と、チェルノブイリ・ヒバクシャの方々とと

もに、２４年間取り組んできた私達「救援関西」の活動も、チェルノブイリ・ヒバクシャの「次の世代」（事故当時まだ子供や若者だった世代）、さらに「その次の世代」（事故当時、まだ生まれていなかった世代）とのつながりへと、これまでベーラさんたちとともに積み上げてきた成果を基礎に進んでゆかねばならない時期を迎えています。さらに「フクシマとの連帯」が加わり、「フクシマを核時代の終わりの始まりに」を合い言葉にした新たな取り組みを今後もどう築いていくのかが問われています。日本の私達も、私たちの「次の世代」に、どうヒバクシャ連帯と反核運動を繋いでいくか…そのような課題についても、ベラルーシの友人の皆さんと話し合うことも重要な訪問目的でした。（ふりつ）

ベラルーシ地図



日程

	移動	午前	午後	宿泊
21 日	9:00 関空発 11:20:北京着 13:05 北京発 17:20 ミンスク着 19:35 松川ミンスク着	7:00 関空集合 チェックイン 外貨両替	松川合流（空港） ホテルに移動ジャンナさんと打ち合わせ	マリノフカのホテル
22 日	車チャーター	移動 9:00 ホテル発	クラスノポーリエ着 ホテルにチェックイン 15:00 教育委員会訪問 17:00 ベーラさん宅	クラスノポーリエのホテル
23 日	徒歩 障がい者センターの車	9:30 子供の障害センター+プリユート 11:30 大人障害センター	14:00 学校＋買物	クラスノポーリエのホテル
24 日	徒歩で回る	10:00 ソーヌシカ幼稚園 12:00 病院	14:00 ギムナジウム 15:30 副区長・教育長訪問	クラスノポーリエのホテル
25 日	チェリコフへは車で往復	8:30 病院（衛生局・統計部）10:00 チェリコフに移動	プラレスカ＋教育長 コロソク幼稚園	クラスノポーリエのホテル
26 日	車チャーター	散歩、病院に資料を取りに行く 10:00 ベーラさんに報告と挨拶 11:00 移動	ミンスク着 ジャンナさん宅訪問	ジャンナさん宅
27 日	バス　地下鉄	バザー用品買い出し カソリック教会見学	マリノフカの移住者との交流	ジャンナさん宅
28 日	16:10 松川ミンスク発 18:50 ミンスク発 （ブダペスト経由）	ジャンナさんと話し合い	ミンスク発	機中泊
29 日	12:40 北京着 16:25 北京発 20:30 関空着		関空着	

【2015 年現地訪問報告・その1～マリノフカ「移住者の会」～】

今回はミンスクのマリノフカに移住した「移住者の会」の皆さんとの交流をお伝えします。

「移住者の会」の人たちは、チェルノブイリ事故から 5 年経って 1991 年に「チェルノブイリ法」ができ、やっと高濃度の放射能汚染地からマリノフカに移住しました。事故によって生活を一変させられ、さらにソ連の崩壊という社会的・経済的な混乱の中で、新しい土地で「ゼロから出発」しなければならなかった人々は互助会「移住者の会」を作り、「一人ではない」とお互いに助け合い励まし合いながら多くの困難を乗り越えてきました。「国際シンポジウム」のために来日されるジャンナさんは、その移住者の会の代表です。そして私たちは、交流を続ける中で「繰り返さないで、チェルノブイリ」が共通

の合言葉となりました。だからこそフクシマ事故が起こった時にジャンナさん達は、日本でチェルノブイリが繰り返されてしまったことにとてもショックを受け、「とても心を痛め、自分たちと同じような悲しい思いをする人が増えるだろう」と、心から気遣ってくれました。そして子どもを護るために、またこれ以上「繰り返さないために」情報を交換し、交流を深めていきたいと日本の私たちにエールを送ってくれました。

「移住者の会」の皆さんとの交流会

「今回は若い人にも参加してほしい」という振津さんの要望に応えて、３０歳前後の若い方も２人参加してくださり、私たち４人も含め総勢１１人で懇談しました。最初こそやや緊張気味でしたが、すぐに打ち解けて予定の時間があっという間に過ぎてしまいました。質問に、あちこちから一斉に大きな声が上がり、通訳の松川さんが困ってしまって思わず苦笑いするほど。それだけ事故当時の事、マリノフカへ移住後の困難な生活、「移住者の会」が支えだったこと等について話したい、知ってほしいという皆さんの強い気持ちが伝わってきました。また皆さんはフクシマ原発事故を気にかけてくださっていて、振津さんが、4 年経っても事故はまだ収束せず、問題がいろいろ複雑化し山積している被災者の状況などを説明すると、皆さんは身を乗り出して聞いていました。同じ原発重大事故の被害者としてとても心配してくれていました。そして「必要なら自分たちの経験を話す」と話されました。そこには「これ以上重大事故を繰り返してはいけない」という強い思いが根底にあり、それがみんなの共通の思いなのだと改めて思わされました。また、幼児を連れて参加している若いお母さんに、事故後 29 年という時の流れと、経験と交流が少しずつ次世代に引き継がれていく手ごたえを感じました。

フクシマ事故の説明を熱心に聴く

以下、話の一部です。

＜カテリーナさん＞（原発から北北東に約 160km のチェチェリスク出身）

事故当時、学校の先生をしていた。３人の子どもと、今では孫が６人いる。夫は事故処理作業者（リクビダートル）だったが亡くなった。放射能汚染があったにもかかわらず、事故直後のメーデーでは屋外で行進をした。事故当時、汚染がわかってからは、子どもの健康を護ることに力を注いだ。５月から６月に、学校ごとに子どもを非汚染地域に避難させた。私達はどこが汚染地域か知らないのでチェルノブイリより遠く離れた所へ行かせた。ベラルーシの国中で事故の被害を重く受け止めていて、私たちの子どもを温かく受け入れてくれた。新学期の始まる９月になると、子どもたちはまた汚染地に帰ってきた。その後、数年は子ども達はあまり外に出ないように８時から２０時まで学校にいて、そこで食事をした。手袋・マスクをして必ず帽子を被った。1991 年にマリノフカのアパートの部屋を貰い、1992 年に子どもと一緒に引っ越した。「移住者の会」を作って団結し、困難を乗り越え助け合った。全く知らない街に引っ越してきたが、会のお蔭で自分は一人ではないと感じることができた。移住者の子ども達はいろんな地域から来ていた。

＜ナターシャさん＞（女の子を連れて参加）

現在ジャーナリストをしている。事故当時 6 歳。クリミアやドイツなどに保養に行ったのを覚えている。マリノフカでは「移住者の会」が運営していた「青少年センター」（注：１５年くらい前までは、ドイツの NGO の支援を受けたベラルーシの NGO が「移住者の会」を支援し、マリノフカのアパートの一角に「青少年センター」を開設していたが、民間団体を統制するベラルーシ政府の施策によって、センターは閉鎖を余儀なくされた。）へよく通った。センターでは、沢山の移住者の若者がいて、ドイツ語を小さい子どもたちに教えていたりした。私はまだ学生だった。祖父母は事故時、ゴメリ州の田舎の村に住んでいたが、事故後すぐに移住させられ、その村は無くなった。今は、ゴメリ州の別の街に住んでいる。

＜ガーリャさん＞（原発から北西約 40km のナローブリア出身）

92 年にミンスクに引っ越してきた。現在、医科専門大学で働いている（語学教員）。マリノフカにはナローブリア出身が多い。仲良く住んでいる。フクシマ事故時、私はたまたまドイツにいたが、多く人が事故の事を気にしていた。ポーランドでも原発反対運動があり「原発事故の真実を語る」というプログラムがあった。「『チェルノブイリ』も『フクシマ』もない世界」という集会がありいろんな国から人を招いていた。ポーランドでのフェスティバルでお金を集め、そのお金でミンスクに子どものためのホスピスを作った。ポーランド人も役に立つと喜んでいる。必要があれば喜んで被災体験の話しをする。皆さんのお役に立てれば幸いです。

＜リーリャさん＞（ナローブリア出身、ガーリャさんの娘さん）

事故 2 年後ナローブリアで生まれ、後にミンスクに引っ越し。現在、学校（ギムナジウム）で働いている。小さかったので、事故の事は覚えていない。ナローブリアに住んでいた祖母の所に行ったことを何となく思い出す。ミンスクに引っ越してきて成長したので、ここのことはよく覚えている。「青少年センター」には若者や小さな子どもが沢山いて、いろんなイベントがあった。私は、まだ小さな子どもだったので、保養は外国に行き、イタリア、ドイツ、アメリカには何回か行った。ホストファミリーとは友達として今でもメールで連絡を取り合っている。

＜リュドミーラさん＞（原発から北東約 130km のベトカ出身）

事故当時、子どもは 2 歳。子ども達は保養に行った。２人目はミンスクで生まれた。チェルノブイリのせいで、上の子と間隔があき、私が３９歳の時に生まれた。子どもはチェルノブイリ事故に関心があり、医療関係の仕事をしている。

夫はベラルーシで一番大きい馬の施設で働いていた。田舎の人間なので、首都のミンスクに来て、大変辛い思いをした。ミンスクに馴染めなかった。馬もどこかに連れていかれ、仕事を失い、何をしていいか分からなかった。それが一番辛かったことだと思う。

＜ジャンナさん＞（ナローブリア出身）

ナロ―ブリアで仕事をしていた。1991 年に子ども２人と夫の 4 人でミンスクに移住した。夫は 1986 年から汚染地で働いていたが、移住して 1 年半後に心臓発作で亡くなった。1996 年、「移住者の会」の代表になった。

（＊詳しくは 4 月 3 日の「国際シンポジウム」での報告をお聞きください。）

Q. 次の世代に伝えたいことは？

・人間は失敗する。私たちの世代の失敗を繰り返してはいけない。

・人間だからは失敗するのは当然だと思う。でもコントロールできないものには触ってはいけない。触らなければいいのです。失敗は繰り返してはいけない。

・人は自分の行動に責任を持つべき。なんでも相談し合うことが重要。

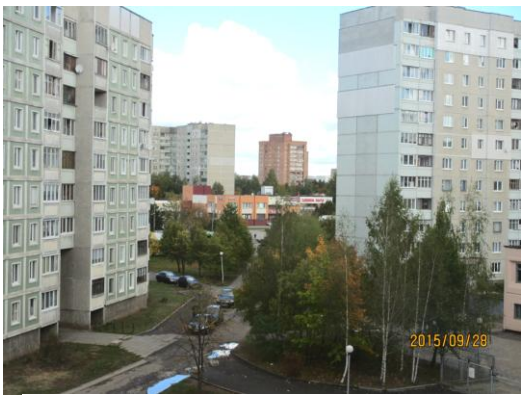
・知識を伝えていかなければいけない。知識も情報もなかったので、リクビダートルはマスクだけして素手で作業した。基本的な知識は伝える必要があると思う。情報は開示されなければいけない。

・事故が起こったらどういうことが起きるかということを考えないといけない。政府がしっかりプログラムを作って、子ども達の教育に生かさなければいけない。

＊ジャンナさんと具体的な支援について話し合い
～支援金でミルク等を購入し家庭に援助～

まず、ジャンナさんから「移住者の会」を代表して、私達の訪問に対し、そして支援を続けていることに対して熱い感謝の気持ちが述べられました。ついで昨年届けた支援金が具体的にどのように使われたか、記録を見せながら説明してくれました。団地の各棟にリーダーがいて、「移住者の会」のメンバーからリーダーに要望があると、それをジャンナさんに連絡をしてくるようです。昨年は 2000 ドルの資金援助をしていますが、粉ミルクを夏・冬 2 回購入して必要な家庭に配ったとのこと。また、亡くなられた方へのお悔みや、寝たきりの方の大人用オムツの購入、さらに「チェルノブイリの日」のセレモニーでの献花・ローソク代にも充てられていました。「移住者の会」の中で、シングルマザー、夫が無職やアルコール依存で働かない、育児中で働けない等、困難な問題を抱える家庭を、ジャンナさんたちがちゃんとフォローされていて、その中で本当に必要とされていることに支援金が使われ、ささやかではあるけど私たちの支援が役立っていることを再確認しました。

そうであれば余計に、もう少し多くの支援ができたらいいのにとつくづく思わされましたが、でも現実は厳しく、なかなか日本でのチェルノブイリ支援カンパも思うようには集まりません。「救援関西」のメンバーも頑張りますが、どうぞ皆さんのご協力をよろしくお願いいたします。（いのまた）



ジャンナさんの部屋（6 階）からの眺め

（＊クラスノポーリエの訪問などについては、次回ジュラーブリに掲載いたします。）

アントンさんとの交流会　～保養キャンプの取り組みについて～

昨年１１月１９日、ロシアのチェルノブイリ事故被災地から来日したアントン・ブドビチェンコさんを囲み、関西でフクシマ事故被災地の子どもたちの保養に取り組んでいる人たちと交流会を持ちました。アントンさんは広島で行われた世界核被害者フォーラムに参加するために来日され、福島で交流された後、大阪に来られました。

以下に、交流会でのアントンさんのお話を紹介します。

＜アントンさんのお話＞

学生たちのボランティア活動から始まったNGO「ラディミチ」

私は長い間、ノボ・キャンプ（ロシアの非汚染地で行われている保養キャンプ）の責任者をしていたが、去年から、ノボ・キャンプを運営するNGO「ラディミチ―チェルノブイリの子どもたちへ」の代表になった。住んでいる所は、ノボツイコフという街で、ロシアの中で最も汚染レベルが高い地域で、原発から１８０㎞離れている。事故後のフクシマでいえば避難指示の出された飯舘村と同じくらいの汚染レベル。

父が学校の先生で、汚染地域の中で生徒と一緒にボランティアのグループを創り、それが元になってNGOができた。「ラディミチ」には医療関係や社会活動等のいろんなプログラムがある。医療関係には甲状腺の超音波検診もあるし、脳性まひ等で障がいがある子どものリハビリをするプログラムもある。「ラディミチ」の建物の一角にそのリハビリをする部屋があり、今では全ロシアから毎年５００人位が訪れる。「ラディミチ」の建物は、地域の子どもたちに解放された「若者センター」になっていて、子どもたちは放課後に集まっていろんな活動をしている。コンピューターのサークルもある。ブリヤンスク州には同じようなサークルが１０位あって、お互いに連絡を取って活動しているが、「ラディミチ」のサークルが最も大きい。また、「チェルノブイリ博物館」という部屋があって、チェルノブイリ事故や、自分たちの地域がどのように汚染されたのか、被ばくに気をつけながら、どのように暮らしていったらいいのか等を展示している。フクシマ事故関連の写真も展示されている。また、精神発達障がいのある子どもには、ディサービス的なクラスもあって、引きこもったりしないように受け入れている。

子どもたちの汚染地域外での保養を～「ノボ・キャンプ」での様々な取り組み

それ以外に、一番誇れるのがサマーキャンプのノボ・キャンプである。ノボ・キャンプはノボツイコフから８０㎞離れているスラーシュという所にあり、そこは汚染されていない。もともとソ連時代にピオネール・キャンプをしていた所を２０年前から借り受けた。キャンプ場の広さは２００m×２００m位。子ども達が寝泊まりする建物は７棟ある。

サマーキャンプというけれども、夏の間の活動だけではない。次の年の準備を、もう１０月、１１月から始める。ロシアでは学校は９月から始まるので、１０月位になると教師を養成する大学に、学生ボランディア・スタッフの勧誘に行く。ベラルーシ、ドイツ、ウクライナ、ロシアなどから学生ボランディアが来て、まず子どもにどう接したらいいかということから勉強を始める。前年の１０月から勉強を

しているので、翌年の夏のキャンプ本番には誰が来ても大丈夫という感じで子ども達を受け入れられる。参加するボランティアは地元の人はもちろんのこと、ドイツ・イタリア・モルドバ、スイス、アルバニアとかいろんな国の人がいる。ボランティアは１８~３０歳位の大体同じような世代の人達だ。でも３０歳過ぎても歓迎ですよ。日本からもボランティアにどうぞ。

キャンプには、いろんなサークルがある。ボランティア・スタッフは、いろんな遊びとかゲームも考えて、自分達で実際にうまくいくかやってみる。週末になるとノボ・キャンプに行って、屋根の修繕とかいろんなメンテナンスをする。そういうことをやることによって、もちろん建物が綺麗になっていくこともあるが、参加する人が楽しみながら仲間になっていく。だからボランティアの人たちはそういう活動そのものが楽しくて自分たちの休養にもなる。

キャンプは１サイクルに普通は１４０人、多いときには１８０人の子どもたちを受け入れる。１サイクルは３週間で、一夏に３～４サイクル行われる。サークルやいろんなプログラムがあるので、参加した子ども達はいろんなことを学んで帰れる。一つのログハウスのような宿泊施設に子ども達は２０人ずつがグループになって生活するが、そこに学生ボランティア２人がスーパーバイザーとして入って、２４時間、３週間、ずっと一緒に暮らす。外国から来るボランティアはいろんな工夫をして、ロシアではあまり触れられないような、それぞれの国の文化を紹介するなど、面白いアイデアとか材料の企画をしてくれる。面白かったのは、イタリアから来たボランティアが日本語を習っていて、キャンプに来て日本語を教えてくれたこともあった。また、コンピュター教室とか、川が近くにあるので、そこでカヌーを漕いだりとか、サバイバル・ゲームのようなこともする。

キャンプ運営のための資金は？～参加者からの質問に答えて

今のロシアの保養は殆どがラディミチのように民間団体が担っている。人々は運営している団体からチケットを買ってキャンプに参加する。

ラディミチのノボ・キャンプの場合、全チケットの２／３を、地方自治体であるブリヤンスク州が買い上げる。残りは個人で買う。一旦、ブリヤンスク州がチケットを買い、貧しい家庭の子どもや、障がいがある子どもに無償で配る。それ以外の子どもたちの家庭では自己負担がある。日本円に換算して７０００～９０００円位（必要経費の１／３位）は払う。このような金額のチケットは、一人の子どもにつき、１年間に１枚しか買えないので、もし２つも３つもキャンプに行きたかったらその分は自分で全額払わなければならない。その場合は３週間で、日本円にして３万円位必要。普通の家庭の１か月の給料は２万２０００～２万５０００円位なので、それなりの負担である。しかし、よその団体が運営するキャンプはもっと高い。例えば、２週間で５万円という所もあり、ノボ・キェンプは、ロシアでは一番安い方だ。いずれにしろ、地方自治体がチケットを買い上げて補助する制度があるので、自分たちは活動を続けられる。夏だけでなくていろいろな活動をするので、そのような活動にも費用はかかる。ロシアでは助成金を貰うのは不可能に近い。父が NGO を立ち上げた時に、支援を依頼する３０通もの手紙

を書いたが、返事があったのは１通だけで、それはドイツの医師のグループだった。そのグループの支援は今も続いている。それが現実である。ロシア国内よりも、ドイツとか国外のパートナーの方を見つけやすい。２５年間、このドイツの NGO のサポートがあったからなんとか続けてこられた。

（写真はノボ・キャンプ HP より）

アントンさんの話しを聞いて…保養のこれからについて考えてみた

小野　洋
「福島の子どもを招きたい！明石プロジェクト」代表
（「たこやき通信」　vol.16 より一部抜粋）

「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」が、ロシアで保養キャンプを主催するＮＧＯ「ラディミチ・チェルノブイリの子どもたちのために」の代表を務めるアントン・ブドビチェンコさんを招いて、関西の保養団体の関係者と交流会に参加しました。少人数の集まりで、保養の細部にわたって質問することができたため、日本の保養が今後どうなっていくのかを考える上で、大変参考になりました。

アントンさんは、ロシアでもたいへん汚染が厳しい地域（福島で言うと飯館村くらい）で、育ちました。彼の父親が代表の「ラディミチ」が、事故から９年目にロシアの非汚染地域での「ノボ・キャンプ」を始め、そこに学生の頃からボランティアで参加するようになりました。その後、キャンプ運営の責任者として長年活動してきたそうです。

日本では、ベラルーシで国が三週間の学校単位の保養が行われていることが知られていますが、ロシアでは少し事情が違います。ロシアでも以前は同じような制度があったそうですが、ソ連崩壊後、暫くしてから、国営の保養所が民間や自治体に払い下げられ、民間の団体が州の補助制度（保養のチケットのような形で団体に分配される）を使って、参加者を募集して実施すするようになったとのことでした。参加費を徴収する、州に住むすべての子どもが保養に参加しているわけではない点など、現在日本で民間団体が実施している保養の状況に似ているところもあります。

ただ、それでも保養チケットという公的支援制度があることが大きな違いです。日本では「ふくしまっ子」制度が、300 以上あると思われる福島県外の団体のうち、わずか数団体しか利用できないという話をしたところ、アントンさんも目を丸くして驚いていました。

アントンさんが住む州にいくつかの保養キャンプの団体があり、事故後３０年経った今も続いていること自体が驚異的ですが、「ノボ・キャンプ」の実際のやり方にも、大いに心が動かされました。

ロシアでは夏休みが長いとのことですが、ノボ・キャンプは夏に、一回のキャンプにつき 140 名以上もの子どもを受け入れて三週間実施、それを３～４回も行うのだそうです。その規模の大きさに、まずびっくりしました。

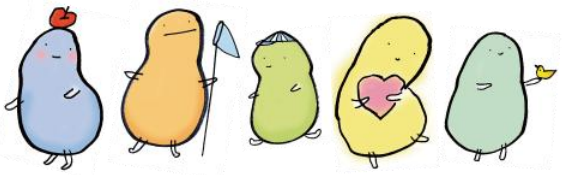
感心したのは、ＮＧＯの活動の一環として、キャンプを実施している施設を使って、学生と一緒にワークショップ的な活動を年間通して行い、キャンプの準備をしていることでした。学生にとっても学びの場になっているとのことです。たこ焼きキャンプもですが、保養にボランティア参加した学生が、普段の学業ではできない貴重な経験をすることがあります。それを意識的・組織的に実践しているという

ことになります。
　また、キャンプの内容も、その回ごとに一つひとつやり方が違い、それぞれ「アート」「コンピューター」などのテーマの活動があり、保養以外の学習的な意味合いも強いと感じました。たこ焼きキャンプも、保養や自然体験の他に、子どもたちが共同生活を通して学ぶという意味が強くなってきているのを感じますが、ノボ・キャンプが学習的な意味合いを強く打ち出していることに、目からうろこが落ちる思いがしました。

　アントンさんに、親の保養に対する意識について質問したところ、表面上は放射能の不安について口にする親はほとんどいないそうで、教育的な意味を求めることが多いとのことでした。このことにも、いい意味で頭を打たれたような思いがしました。（そうした面もありますが、他方でアントンさんのＮＧＯでは、チェルノブイリ事故の資料館を運営したり、甲状腺の検査も行ったりしています。）
　たこ焼きキャンプに参加させている親とも、最近、放射能について話すことが、本当に少なくなりました。放射能がそこにあることがもう当たり前のことになっていて、その中で全体として、どうやっていい状況で子どもを育てていけるかが、主な問題になってきているのだと感じます。
　先日の同窓会でも、キャンプ初参加の若いお母さんたちとゆっくり話しましたが、その話題のほとんどは、普通の親と変わらない、子育てについてのあれこれの悩みでした。
　それでも、よく考えてみれば、原発事故が間接的に子育て上の困難を生んでいる（福島県内のあちこちで子どもが荒れている、という話も耳にしますし、親の生活の変化が子どもに相当な影響を与えていることも想像されます）だろうし、そもそもこうして保養キャンプに参加させている時点で、放射能への不安が確実にあるということなのです。
　たこ焼きキャンプが手探りで模索しながら進んでいる道と、アントンさんたちがロシアで歩んできた道が、非常に近いものであるように思え、心から励まされる気持ちがします。
　原発事故の影響から子どもの健康を守るという本来の趣旨を原点として大事にしつつ、原発事故被災地で育つ子どもたちに、生きる力につながるようないい経験の場を提供するという、これまで漠然として感じていた方向性が、これでいいのだと思える機会となりました。

＊「福島の子どもを招きたい！明石プロジェクト」主催の「たこ焼きキャンプ」については、下記ブログをご参照下さい。
http://takocamp.exblog.jp/

ほようかんさいについて（ほようかんさい ＨＰ より）



関西だけでも、少なくとも 30 団体以上が保養に取り組んでいます。原発事故以降、経験を分かち合い、知恵を出し合いながら、私たち関西で保養に取り組む団体は横のつながりを丁寧に作ってきました。ほようかんさいは、そうした団体が関西一円での活動を円滑化するため、2014 年に発足した緩やかなネットワークです

http://hoyoukansai.net/index.html

先住民と連帯し 日本企業の新たなウラン開発にストップを！

「核のない未来を！」訴え、広島で「世界核被害者フォーラム」開催

昨年、被爆７０年を迎えた広島で、11 月 21–23 日「世界核被害者フォーラム」(フォーラム)が開催されました。フォーラムには世界１８カ国から、核被害者、反核・平和・人権擁護などの活動家、科学者や専門家、ジャーナリスト、学生など 400 名越える人々（実行委員会最終確認：三日間延べ 1000 人以上）が参加し、国内外の核被害者の訴えに耳を傾け、「核と人類は共存できない」ことを改めて確認しました。また、核被害をもたらした国家・核産業等の責任を厳しく問い、核被害者の補償と人権の確立を求め、これ以上の核被害を許さない運動の連帯を誓い合いました。そして核被害者の情報共有など、国際的ネットワーク作りの必要性などが議論されました。最後に「広島宣言・世界核被害者の権利憲章要綱」と「フクシマを忘れない、繰り返させない特別アピール」が採択され、「核のない未来を！フクシマを核時代の終わりの始まりに！」と訴えました。（詳細は「世界核被害者フォーラム」ウェブサイト＜http://www.fwrs.info/＞をご参照下さい。）

米先住民 ペテゥーチ・ギルバートさんを迎えて大阪でも交流会

１１月２４日に、広島のフォーラムに参加した米先住民アコマ・プエブロの活動家のペテゥーチ・ギルバートさんを迎えて、大阪でも交流会を持ちました(救援関西、ヒバク反対キャンペーンの共催)。交流会では、インドからフォーラムに参加した、映画監督のシュリプラカッシュさんにも「飛び入り」で話しをして頂きました。シュリプラカッシュさんは、インドのジャドゴダでも、先住民が危険性を全く知らされずに、ウラン採掘・精錬による深刻な被害に曝されていることを、映像を交えて告発しました。

ペテゥーチさんの訴え「これまでの被害の上に、さらに聖山でのウラン開発など、許せない」

ペテゥーチさんは、広島、大阪の後、東京と福島でも講演し、日本の人々と協力して先住民の聖地での新たなウラン開発を止めたいと訴えました。以下にペテゥーチさんのお話の概要を紹介します。

「米西部１５州には１万を超えるウラン関連施設（採掘、精錬、廃棄物貯蔵所、等）がある。ニューメキシコ州は核開発と密接に結びついており、ウラン関連施設だけでなく、原爆が開発製造されたロスアラモス国立研究所、初めて原爆実験が行われたトリニテ

福島・浪江町／津波による犠牲者の碑の前で祈りを捧げる

ィ・サイト、廃棄物隔離パイロット・プラント（WIPP）やウラン濃縮工場もある。

私はフォーコーナーズ（コロラド、ニューメキシコ、アリゾナ、ユタの４州境の交わる地点）近くのグランツ・ウラン鉱脈の地域に住んでいる。1940 年代から５０年間にわたるウラン開発のため 100 ヶ所近くのウラン廃坑、５つの精錬所跡が残され、今なお、空気、水、土壌の環境汚染が続き、人々の健康と生活が脅かされている。動物も含め、私たち全員が「放射線被害者」だ。しかし国や州は、未だにちゃんとした疫学調査をこの地域で行っていない。個人や NGO が資金を集めて健康調査に取り組んでおり、放射線被ばくによるガンや、精錬に使用した化学物質によると考えられる腎、循環器、自己免疫疾患など様々な健康被害が報告されている。ウラン鉱山や精錬所で働いた人々だけでなく、危険性を知らされなかったために、汚染した衣服などを通して家族も被ばくした。

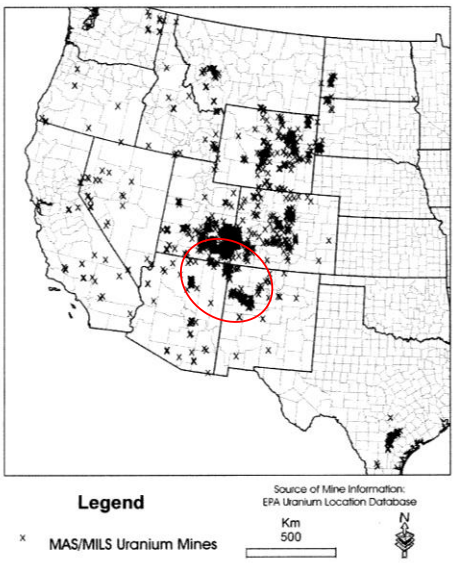
私たちは、アコマや周辺の１５の先住民部族全ての聖山であるカウェシュティマ（アコマの人々の言葉での名称。英語名は、テイラー山。）を、新たなウラン開発からを守ろうと運動している。この聖山は先住民にとって歴史的文化的に重要な地域であることから、州と連邦政府は『伝統的文化遺産』（TCP）に指定した。その TCP 内にウラン鉱山開発を計画しているロカ・ホンダ・リソース会社は、カナダと日本の合弁会社で、住友商事が４０％出資している。住友が撤退すれば現地会社は維持できず、開発はストップするとも言われている。

もしロカ・ホンダ鉱山が開かれたら、汚染水が下流のアコマの居住区にも流れてくる。私たちの地区は湿度が非常に低く、年間の降雨量は４０センチくらいしかない。水は非常に貴重なもので、先住民にとって水源の泉や川は聖なるものだ。私は『先住民世界協議会』の代表でもあり、ウラン開発による先住民の権利侵害の問題を国連人権理事会でも訴えている。

米西部にあるウラン産業が残した廃棄物

- 米環境省の推定US: 西部15州に 約10,400 のウランの廃坑 精錬所跡
- 米鉱山局の推定: 約4,100 のウラン鉱山 地域がある

Source: http://www.epa.gov/rpdweb00/tenorm/uranium.html



私はニューメキシコの先住民で、自分達の地域の環境を守る責任がある。フォーコーナーズからフクシマに至るまで、全ての地球上の人々が、『母なる大地』の先住民であり、それぞれの地域の環境を守るのは私たち全員の責任だ。互いに平和を維持し、協力しなければならない。」

日本の原発再稼働反対と結び、米先住民と連帯し、住友商事の聖山でのウラン開発にストップを

11 月 25 日には東京で、ペテゥーチさんを先頭に、原水禁、ヒバク反対キャンペーン、チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西として、住友商事本社を訪問し、ロカ・ホンダ・ウラン開発プロジェクトからの撤退を求めるよう要請しました。ペテゥーチさんは、「先住民はウラン開発の被害に苦しんできた。もうこれ以上の被ばくを押しつけないでほしい。」と訴え、１０項目にわたる質問状を

提出しました。（別記）

１ヶ月以上経って、催促してやっと送られてきた住友からの回答は、「現地事業会社を通じて調査中。質問項目について確認し、最終的事業化可否について判断する。」という、極めて不誠実な内容でした。今後も引き続き、米先住民と連帯し、日本の原発再稼働反対とも結んで、運動を拡げ、住友商事のロカ・ホンダ・ウラン開発プロジェクトからの撤退を求めていきたいと思います。皆さんのご協力をよろしくお願いします。

振津かつみ

質 問 書

住友商事株式会社 殿

1. 貴社はロカ・ホンダ資源会社（以下、ロカ・ホンダ）が採掘を計画している地域の水の供給源についてご存知ですか。
   その土地は標高が高く、地表水がほとんどない砂漠に近い気候条件にあります。
2. 貴社はロカ・ホンダがどれだけの量の地下水を使用し、汲み上げようとしているかご存知でしょうか。
   [一日あたり、1000 万ガロン＝約 38000 リットルです。]
3. 貴社は、ロカ・ホンダが採掘をしようとしている地域の年間の降雨量をご存知でしょうか。
   [年間 15 インチ＝38.4 センチ以下です。貴社は、環境影響書案（森林省作成）に記載されている、同地域の気候、地理、水文学を、認識すべきです。]
4. 貴社はマウント・テイラー「伝統的文化遺産」(TCP)をご存知でしょうか。ロカ・ホンダは TCP の指定に際して、反対の立場を取っていました。TCP が確定した今もなお、ロカ・ホンダは貴社のパートナーとして、採掘プロジェクトを進めているのですか。貴社は、ニューメキシコ州と連邦政府の法に基づいて定められる TCP とは何か、ご存知ですか。
   [TCP とは、州政府と連邦政府によって、現在と将来世代にとって、重要な歴史的、あるいは文化的意義がある地域と認定された地域のことです。]
5. 貴社は、ロカ・ホンダがマウント・テイラーTCP 地域内で採掘をしようとしていることをご存知でしょうか。
   [ロカ・ホンダが採掘を計画している場所のうちの二区画が、マウント・テイラー伝統的文化遺産地域です。]
6. 貴社はロカ・ホンダがどこでウラン鉱石を精錬しようとしているか、ご存知でしょうか。もし知っているのであれば、（精錬所に鉱石を持って行くために）ナバホ・ネーションの土地を横断しなければならないこと、そしてナバホ部族は放射性物質を彼らの土地で運搬することを禁止しているのをご存知ですか。
   [最も近くにある操業中の唯一の精錬所は、ユタ州のブランディングのホワイト・メサ精錬所ですが、この精錬所はロカ・ホンダ鉱山の現場から数百マイル（＝数百キロメートル以上も）離れているの

です。最短の運搬経路は、ナバホの土地を横断していますが、ナバホ族は放射性物質を彼らの土地で運搬することを禁止しています。]

7. 貴社は、ウラン採掘、ウラン廃棄物、そしてウラン鉱石の運搬による放射線の危険性をご存知でしょうか。
   [これらの全てから放出される放射性物質と放射線は、土地、水、空気を汚染します。それら全てが人びとの健康に影響を与えます。]
8. 貴社は、グランツ鉱脈地域における、50 年間にわたるウラン採掘と精錬が残した遺物をご存知でしょうか。
   [ウラン採掘と精錬は、1940 年代から 1990 年代にかけて行われました。その結果、この地域には 97 カ所のウラン廃坑、５カ所のウラン精錬所跡が残されました。これら全てによって、土地、水、そして人びとが、放射能の危険に曝され続けているのです。
9. 貴社は、「先住民の権利に関する国連宣言」(UNDRIP)をご存知でしょうか。特に、採掘を行う前に、先住民から、強制することなく、事前にインフォームド・コンセント（説明した上で承諾を得る）ことが求められていることをご存知でしょうか。貴社は、ロカ・ホンダは、アコマ・プエブロ、ラグーナ・プエブロ、ズニ・プエブロ、ナバホ・ネーション、そしてホピ族に、意見を求めなければならないことをご存知でしょうか。
   [UNDRIP は 2007 年に、日本政府も賛成票を投じて採択されました。]
10. ウランのスポット価格が１ポンドあたり 40 ドル未満の現状において、貴社はウラン採掘からどのようにして利益を得ることができるとお考えですか。貴社は、東京電力福島第一原発事故の前に、ロカ・ホンダでの開発の調査を行いましたが、（福島事故後の今もなお）共同開発のパートナーであり続けるのでしょうか。もしそうであれば、なぜですか。ロカ・ホンダは、ニューメキシコ州議会に対し、１ポンドあたり 75 ドルの価格でないと、利益は見込めないと報告したことを貴社はご存知ですか。
    [米国におけるウランのスポット価格は、１ポンドあたり 36 ドルです。]

[暫定訳、振津かつみ]

2015 年１１月２５日

ペテゥーチ・ギルバート
「安全な環境を求めるラグーナ・アコマ連合」

＜ペトゥーチ・ギルバートさん／プロフィール＞
ペトゥーチ・ギルバートは、ニューメキシコ州のアコマ・プエブロと呼ばれる先住民の部族の出身である。元アコマ・プエブロ自治政府職員。1986 年から国連における先住民に関する様々な取り組みに参加し、また先住民の権利に関する米州先住民人権宣言の作成に取り組む米州機構の会議にも出席してきた。彼は現在、ユネスコ協議資格を持つ NGO である「先住民世界協議会」の代表、及び「安全な環境のためのラグーナ・アコマ連合」の副代表を勤める。またウラン鉱脈のあるグランツ地域の「安全な環境のための多（文化)連合」のメンバーでもある。アコマ・プエブロのコミュニティの環境問題に継続して取り組んでいる。

［２０１５年・会計報告］

・チェルノブイリ支援・交流

収入	カンパ	562936
支出	現地訪問：支援・交流	452735＊
	通訳謝礼/現地移動費等	356519
	小計	809254
収支		－246318
繰り越し		775195
現在高（円）		528877

・フクシマ支援

収入	カンパ	86652
支出	「ゴーワク」カンパ	100000
	その他	16500
	小計	116500
収支		-29848
繰り越し		329759
現在高（円）		299911

・保養支援

収入	カンパ	268170
支出	ノボキャンプ参加費	354698
収支		-86528
繰り越し		125204
現在高（円）		38676

・運営会計

収入	会費・カンパ	304000
支出	送料	156958
	紙・印刷代	41534
	バザー物品購入	46441
	集会賛同金	32320
	その他	10640
	小計	287893
収支		16107
繰り越し		54973
現在高（円）		71080

＊現地訪問支援内容

資金援助	マリノフカ（移住者の会）	2000（ドル）	
救援物資購入	クラスノポーリエ：		
	ソーヌチカ幼稚園	220	
	子どもの障がい者センター	220	
	成人の障がい者センター	220	
	学校	216.7	
	ギムナジウム	220	
	チェリコフ		
	プラレスカ	300	
	コロソク幼稚園	300	
合計		3696.7	452735 円

注）1 ドル＝122.46 円として計算

会費・カンパ納入／お礼とお願い

日頃からの皆さまの物心両面にわたるご協力をありがとうございます。

今年はチェルノブイリ 30 年・フクシマ 5 年にあたり、そして秋には「救援関西」発足 25 年を迎える節目の年です。「救援関西」も参加した実行委員会として、4 月 3 日に「チェルノブイリ 30 年・フクシマ 5 年・国際シンポジウム」を企画しています。この節目の年に、チェルノブイリ・フクシマの被災地の方々との交流・支援をつなぎ、深めると共に、今までの活動を振り返りながら、チェルノブイリ・フクシマを繰り返さないために「フクシマを核時代の終わりの始まり」をめざして何ができるのか、皆さんと共に考え、活動をしていきたいと思います。

今までもこれからも「救援関西」は皆様からのご支援・ご協力のみによって資金的にも支えられています。今までのご支援・ご協力に感謝いたしますと同時に、皆様のより一層のご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

また、今回「国際シンポジウム」の賛同カンパもお願いしています。この厳しいご時世に恐れ入りますが、どうぞ趣旨をご理解いただいて、こちらにもご協力をよろしくお願いいたします。振り込み用紙は、使途を明記していただいて 1 枚にまとめていただいても結構です。

どうぞよろしくお願いいたします。

なお、すでにご協力を頂いている方には重複する失礼をお許しください。

カンパ・会費の納入ありがとうございました！！

(2015. 11. 13～2016. 02. 07)

木村英子　吉田葬祭　富田洋香　長沢由美　井上和歌　内山啓治　川辺比呂子　尾崎浩子　吉峰祥子　藤尾周作　門林洋子　松本郁夫　振津かつみ

(順不同・敬称略)

ニュース発行:チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西事務局
連絡先:〒591-8021　堺市北区新金岡町 1-3-15-102　猪又方
tel:0722－53－4644
e-mail: cherno-kansai@titan.ocn.ne.jp
郵便振替:00910-2-32752
口座名:チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西